



教皇様の聲

Libreria Editrice Vaticana, Città del Vaticanoの転載許可済
© 1996 発行所
財団法人 精道教育促進協会
〒659 兵庫県芦屋市船戸町1-2-6
TEL.0797-31-3452・FAX.0797-31-3448

聖母マリアは教会の模範

▲ 今日、全教会はいとも聖なるマリアの被昇天を祝います。主は「偉大なこと」(ルカ1・49)をなさった、すなわちこの世に生命の与え主を

もたらした婦人を死と滅びから守られたのです。第二バチカン公会議は、聖母を「確実な希望と慰めのしるし」(教会憲章68番)と呼んでいます。このようにマリアは輝かしい「教会の始まり、教会の模範」(被昇天の序唱)です。神は永遠から全ての人を救いに呼んでおられますが、キリストの過越しの秘義はいち早くマリアの上に救いの約束を実現させました。この世の旅を続ける信者は「太陽に包まれた婦人」(黙示

録12・1)マリアをおおぎ見ます。日々の旅の中で、マリアはただり着くべき目的地を指し示してくれる明るい星なのです。

被昇天は、マリア個人の召命(主イエズスの母・弟子としての)の総仕上げとやうにとどまらず、人間一人ひとり、全人類の贖いを目指す普遍的救いの計画を、神が忠実に実行しようとしておられることを雄弁に物語っています。

▲ 処女であり母であるマリアの姿には女性の特徴が余すところなく表わられています。女性を男性と区別する資質が、最高度の輝きを帯びてマリアの内に示されているからです。マリアに目を注げば、あら

ゆる女性が自らの真の尊厳と価値を見出せるでしょう。

この大いなる祝日に、私たちは世界中の女性を聖母に委ねずにはいられません。女性が自らの使命に気づき、人類発展のあらゆる分野で、特に生命を守るために、不可欠な貢献を惜しみなく果たしてくれますように。(…)

▲ 被昇天の祝日は、マリアが身体と靈魂ともども御父の家へ、天のエルサレム、私たち皆が目指す平和の都へと帰られたことを思い起こさせます。そこで教会は、主の御母に

天の元后という称号を捧げると共に、聖母にふさわしい平和の女王という名で呼びかけることを好んでいます。願わくは天のエルサレムの女王、平和の元后、歴史の中を旅する子供たちのため、絶えず御子にお取り次ぎください。待ち望んだ平和と調和の実りが世界のすみずみに

まで広がりますように。祝された処女よ、全人類を守りたまえ。不正と憎しみと暴力の犠牲となった人々を守りたまえ。世界に、特に戦火にさらされた地域に平和をもたらししてください。全ての人の確かな希望・慰めのまことのしるしとなってください。

天にあげられた聖母マリア、私たちのために祈りたまえ!(九五・八・十五、被昇天の祝日に、お告げの折りの時のお話)

教え、聖化し、治める司教

第二バチカン公会議を振り返る シリーズ6

《毎週日曜日正午のお告げの祈りの前に、教皇さまは聖ペトロ広場に集まった人々に前に書斎の窓から短かいお話をされます。第二バチカン公会議から三十年、21世紀の始まりを目前にして、公会議の意義をテーマに話がが続いています。今回はその第六回目です。》

1 司教とは何者か、その役割とは? それは第二バチカン公会議で深く掘り下げられたテーマの一つでした。公会議文書の「教会憲章」と「教会における司教の司牧任務に関する教令」(以下「教令」)がそうです。

教会憲章では、聖なる位階制の問題は「神の民」と関連づけて論じられています。公会議は、聖書と聖伝に一致して、

「神の制定によって使徒の位置を継承した者」(教会憲章20番)である司教の務めは神の民の間に入って奉仕することであると確認しています。叙階の秘跡を受けた司教には、「師・牧者・大司祭であるキリスト自身の代理者」(同21番)として、キリストその人としてふるまう力が与えられています。司教はペトロの後継者を頭にいたたく「使徒団体」(同22番)の一員としての位階的交わりの内にそうするのです。

公会議から三十年、会議で示された「団体性」(司教が全員で、教皇と共に全教会の司牧と教導の任務を行うこと)が現実のものとして実を結びつつあります。「教会における司教の司牧任務に関する教令」が、教会共同体に豊かな生命を吹き込む

交わりを新たな表現で指し示すことができたのは、まさにこうした洞察力のたまものでした。教皇庁の国際化（教令10番）や司教協議会の創設（同37番）を思い起こせば十分でしょう。

シノドスは、司教たちがローマ教皇と協力して行なうべき務めである「全教会についての配慮」を示すこの上ない例です。（同5番）

2 「教会憲章」と歩調を合

わせ、司教に関する教令は「キリストの教会が真に現存し、働いている」（教令11番）部分教会にも大いに注目しています。神のみことばと聖霊の力と共にある司教団に導かれた教

会が、日々築き上げられ、成長するのは部分教会の中でなのですから。公会議が描いた司教の姿は、キリストの御名において神の民を教え、聖化し、治める牧者の姿です。このような奉仕職には特定の権威が必要となりますが、それは交わり及び奉仕のためであると理解した上で行使するべきものです。司教は共同体の「真の父として、すべての人に

対して愛と心づかいの精神をあらわさねばなりません。（教令16番）耳を傾け、全てのカリスマをうまく活用し、信者各自の正当な必要を理解する用意がなければなりません。こうした司教の任務を助けるため、教令は司祭・修道者・信徒が積極的に参与して、司牧のためのプランを練る司牧評議会の設置を勧めています。（教令27番）

緒に高間で聖霊の降臨を待ち受けました。使徒たちにとって、キリストの御母は主のみ顔のものだったことでしょう。「使徒の元后」を呼び求めて祈りましょう。教会の全ての牧者たちのためにとりなし、司教たちが多様な奉仕職を務める中で日ごとますます善き牧者の姿に近づけることができるよう、助けてくださいますように。（九五・十一・十九）

司祭は祈りの人

「司祭の役割と生活に関する教令」 発布三〇周年を記念して

司祭とはどのような人でしょうか？ 司祭職とは何でしょうか？ 司祭職は一つの召し出しです。誰も自分で司祭になることはできません。神から呼ばれた人だけが司祭になるのです。ヘブライ人への手紙によれば、司祭職への神からの召し出しは旧約の時代に限るものではありません。何よりもまず、御父と同じく神である御子キリストご自身がメルキセデクのように新しい新しい永遠の契約の永遠の司祭とされました。御子の司祭職への召し出しには、三位一体の秘義が現われています。同時に、キリストの司祭職は

託身の必然的な結果です。永遠の神の独り子はマリアから生まれ、被造物の世界に入り、唯一の司祭となりました。だから新約の教会において秘跡による司祭職を受ける人は、キリストの唯一の司祭職にあずかる者となるのです。

司祭職は賜です。「神に召された者の他、この誉れを自分で受けることはできぬ」（ヘブライ5・4）と聖書にあります。

司祭職は教会の生命と使命全体の中枢です。司祭職は秘義であり、人間よりも偉大です。ここで聖パウロの言葉を繰り返す必要があります。

す。「神のさばきは計り知れず、その道はきわめがたい。」（ローマ11・33）

ミサ聖祭は生活の中心

(…) 私自身の召し出しを振り返ってみると、それは「おとなの」召し出しだったと言わざるを得ません。ある意味では青年時代から予見してはいましたが、一九三八年、中学校に入ってから、ポーランド語の本を読み始めました。クラクフでの大学時代、語学は私の興味と学究心を同時に満たしてくれましたが、一九三九年九月の第二次世界大戦勃発で学業は中断されました。翌四〇年九月、最初は石切り場で、次に炭酸ナトリウム工場で働き始めました。司祭職への召し出しが熟して行ったのは、まさにこの

ような困難な状況の中でした。祖国全体を覆う苦難の中で、労働者にまじって肉体労働をするうちに、召し出しは成長していききました。多くの司祭たち、特に私の告解を聞いてくれた司祭の霊的指導も忘れることはできません。一九四二年十月、私はクラクフの大神学校に入学を許されました。あいかわらずナトリウム工場で職工として働いてはいましたが、大学の神学部のもぐり学生になると同時に、クラクフの大神学校の学生の一人でもあったのです。一九四六年十一月一日、私はサビエーニャ枢機卿によって、彼の個人礼拝堂で司祭叙階を受けました。

司祭は聖体の人です。五〇年におよぶ司祭生活の間、私にとって今でも一番大切な一番神聖な瞬間は、聖体を祝

う時なのです。祭壇では、私はキリストご自身として（キリストのペルソナにおいて）聖体祭儀を行ないます。今まで、欠かすことなく至聖なるいけにえを捧げてきました。それは私の心掛けとは無関係の理由によるものです。ミサ聖祭は私の生命と日々の生活の中心そのものなのです。ミサが司祭についての神学の中心であることを、私は教科書よりむしろ、聖なる司祭たちの生きた模範から学びました。一人をあげればアルスの聖なる主任司祭ジャン・マリー・ヴィアンネーです。(…)しかし影響を受けた司祭は一人にとどまりません。伝記を通して、あるいは同時代の人だったので直接出会うことのできた尊敬すべき司祭たちは他にもいます。私は彼らを見て、召し出しとして、

「子どもと秘跡」

*特に子供との関係から、告解・聖体・洗礼について考察する。

「子供の性教育」 *性教育を情操教育、感情教育といった根本的なところから考察。

ライト枢機卿他著 井上博嗣・平井英子訳 定価七三三円

ホルダン著 中島紀子訳 定価八〇〇円

いずれも送料一冊三〇〇円。

また秘義としての司祭職とは何であるかを学びました。

司祭は祈りの人です。

「私は、私自身を生かしてくれらるるものであなた方を養おう」と聖アンセルモは言いました。祈りと黙想を通して、宣言された真理を見出し、生活に生かさねばなりません。言葉による奉仕は、まず祈りの中で用意したことを伝えることから始まります。

しかし、それが司祭の祈りの唯一の面ではありません。司祭は神と人間との間の仲介者ですから、多くの人が司祭に祈りを頼みます。このように祈りはある意味で司祭を、特に牧者としての司祭を「造りだす」のです。また同時に、司祭はみな祈りを通してたえず「自らを造り」ます。私は聖務日課(時課の祈り・教会の祈り)の素晴らしい祈り、全教会が役務者たちの唇を通してキリストと共に唱える祈りを考えています。さまざまな人々がたえず私に依頼する、膨大な願いや意向もあります。それらは私の礼拝堂のひざまづき台の上にあり、常に私の念頭にあります。毎日必ずしも一字一句繰り返すことはできないにせよ、ひざまづき台と私の心の中にある限り、主イエズスもご存じであると言っても差し

つかえないでしょう。

司祭の身分はキリストへの忠誠を要求する

今日、司祭であるとは。

「司祭とは」というテーマは常に時宜にならなっています。それは、私たち司祭が「自分自身であること」に関わるからです。第二バチカン公会議中とその直後、これについていろいろなことが言われました。おそらく問題は、世俗化や信心の放棄から生じた特定司牧上の危機から生じたのでしょうか。司祭たちは自問し始めました。「私たちはまだ必要とされているのだろうか?」多くの司祭が、自らのアイデンティティを失う兆候が現われました。

ヘブライ人への手紙にあるように、司祭は始めから「罪をあらがう供え物といけにえを捧げるため、人間の中から選ばれた」(5・1参照)者です。これこそ司祭の独自性についての最良の定義です。どの司祭も、創造主から授かった賜によって、さまざまな方法で司祭の役務を通して神に仕えることができ、人間生活のさまざまな分野に入ってそれらを神のもとに近づけることができます。それでも司祭は、あくまで他の人々の中から選ばれて「神の前で人々

の代理者となる」存在です。またそうでなければなりません。司祭のアイデンティティは司祭職にとって重要です。人々の間での証しのために重要で、人々は彼の中にただ司祭のみを求めます。人々は、花嫁である教会を愛する真の神の人、絶対者である神の証人、信仰の目に映る見えない現実の証人、祈りの人、まことの教師・案内者・友を求めています。このよう司祭の前なら、信者たちは容易にひざまづいて罪を告白することができ、ミサにあずかれれば叙階の秘跡の力で司祭の手と心に聖霊の塗油がなされていることに気づくでしょう。

司祭の独自性はキリストと神

社会の諸問題に 福音の光をあてる

(…)現代を特徴づけるのは、倫理的な相対主義によって人々の心からキリスト教的な考え方が消えつつあることです。このままでは神の否定につながるかねません。その行き着く先は「個人の尊厳と責任には関係なく社会秩序を打ち立てようとする」(回勅「新しい課題」13

の民(この民のもとへ司祭は派遣されています)への忠実を求めます。それは司祭の自己認識に関わるだけでなく、常に人々に検証され、確認されてきた事実です。司祭は「罪をあらがう供え物といけにえを捧げるため、人間の中から選ばれた」からです。

司祭はどうすれば自らの召命を完全に果たすことができるでしょうか? 司祭の皆さんはその秘密をよくご存じです。神の助けに信頼し、たえず聖性を求めて戦うことによつてです。皆さん一人ひとりのために祈ります。「按手によつて神から受けたたまものを、皆さんが日々燃え立たせるように望

みます。(IIティモテオ1・6参照)また、イエスとあなた方をつなぎ、あなた方どうしを一つに結ぶ深い友情の喜びを感じるように望みます。そして、神の民が神と全ての人への大きな愛のうちに成長することを見つめる喜びを体験することの嬉しさ、あなたのうちによい業を始めた方がイエス・キリストの日にそれを完成してくださるとの確信を深めることの嬉しさを感

じるように望みます(フィリピ1・6参照)。「現代の司祭養成」(82番)

聖マリア、司祭たちの御母が、その模範と取り次ぎによつて皆さんを支えてくださいますように。(九五・十一・二七)

番参照)ころみであり、消費第一主義におおられた欲望です。こうなればテクノロジーが倫理に取って代わり、物が人格に、物質が精神の上位に来る結果となるでしょう。(回勅「人間の贖い主」16番参照)福音に記された道徳価値と贖い主が人間に啓示した人生の超越的な目

的をはつきりと世に示す必要があります。しかし、この世の事柄には明らかに正当な自律性が備わっていることもまた認めねばなりません。公会議文書「現代世界憲章」が述べているように「被造物や社会そのものが独自の法則と価値を持ち、人間はそれを次第に発見・利用・調整していくものと解釈するならば、それを要求するのは当然である。」(36番) いずれにせよ、人間は責任ある対応をしなければなりません。正義と協調に満ちた社会を築くためのみなら

不変の教え

ず、「神は人間がその創造主を
 探し求め、自由に完全さに達す
 ることができるように、へ自分
 で判断する力」(シラ15・14)
 をお与えになった」(「真理の
 輝き」39番)ことを思い起こさ
 せるために。

従って司牧活動は、シノドス
 後の勧告「信徒の召命と使命」
 の基本的な考え方、すなわち全
 ての人が聖性に招かれていると
 いう主張を実現させるものでな
 ければなりません。私たちはた
 えす「愛によってご自分の前に
 聖である者、汚れない者」(エ
 フェゾ1・4)となるよう神の
 招きを受けています。(…)

信徒の共通の司祭職の偉大さ
 は、このような聖性への招きか
 ら生じるものです。司祭職に
 よって信徒はキリストの肢体の
 中にふさわしい地位を占めま
 す。それは信徒の尊厳の基盤で
 あり、世の終わりまで続くキリ
 ストの命令に従って教会が果た
 すべき贖いの使命に加わるよ
 う、信徒に呼びかけています。
 キリスト信者として生活し、教
 会内で働く忠実な信徒は、司
 教・司祭の単なる助手ではあり
 ません。洗礼は、信徒に対して
 自らの生活の中でキリストの司
 祭職を実行する権利と義務を与
 えます。信徒の正当な自律性と
 は次の通りです。現世の事柄に

関わる社会における地位や状況
 がどうであれ、誰であろうと人
 種や文化には関係なく、社会に
 一定の場を占める権利を持ち、
 「教会がこの世で果たすよう、
 神から委ねられた使命」(教会
 法典204条)を実行するために
 召されている。信徒に固有の
 分野とは、地上の世界での使徒
 職です。現世の営みに関わる信
 徒は、キリスト者として自己の
 身分や生活、職業にそった活動
 に参加します。(前掲書20条、

「信徒の召命と使命」17番参
 照)従ってそこには世俗の分野
 と教会活動との混同ないし衝突
 が起こる余地はありません。
 (それは控えめにしても時代錯
 誤と言うべきでしょう。)第二
 バチカン公会議によれば、「信
 者の共通司祭職と職位的または
 位階的司祭職とは、相互に秩序
 づけられていて、それぞれ独自
 の方法で、キリストの唯一の司
 祭職に参加している。」(教会
 憲章10番)

「職位的・位階的司祭職」と
 いう表現は、(教会内で司教と
 司祭が)「兄弟たちのために務
 める聖職」(同13番)とされて
 います。また「信者の共通司祭
 職」は、洗礼の秘跡と結び付い
 て、キリスト信者の司祭職の意
 味と目的が「あらゆるわざを通
 して霊的供え物を捧げる」(同

10番)こと、あるいは聖パウロ
 が言うように「体を生きた清い
 神に嘉せられるいけにえとして
 ささげる」(ローマ12・1)こ
 とであるとされています。従っ
 てキリスト信者の生活は神に捧
 げられる賛美、個人と全教会
 が捧げる礼拝と見ることができ
 ます。聖なる典礼(典礼憲章7
 番参照)、信者たちの共有する
 「超自然的な信仰の感覚」(同
 12番参照)に基づいて信仰と福
 音の証人となること(教会憲章
 10番参照)：これらはこの司祭
 職のあらわれです。そしてこれ
 らは、キリストの神秘にあずか
 ることによって生活が自己奉獻
 に変わる時、洗礼を受けた人々
 の日々の生き方の中に具体的に
 実現されます。(…)

個人であれ、共同体としてで
 あれ、信徒には幅広い行動の自
 由がありますが、そこには共通
 の分母とも言うべきものがあり
 ます。それは意識して受け入
 れ、通常実践している信仰で、
 これがなければ信仰告白がにせ
 ものになる恐れがあります。
 「生活が各人と社会全体に課す
 問題と期待に対して、信仰がど
 のように有効な答えであるかを
 あかしすること」(「信徒の召
 命と使命」34番)こそ、キリス
 トの預言職にあずかるゆえに特
 に信徒に課せられた務めです。

そのため、「教会を作り上げて
 いく中で、女性も預言的役割を
 演じることを求められている」
 (「司祭への手紙」九五・三・
 二五)ことを大きな期待を込め
 て強調しました。家庭で信仰の
 最初の手ほどきをする多くの女
 性たちの、著名な男性たちにも
 劣らぬ英雄性と不屈の忍耐に満
 ちたあがしを思い起こさずには
 いられません。教区内で子供た
 ちのカテケージスにたずさわる
 大勢の修道女および女性信徒
 の、忍耐強く自己を顧みない奉
 仕に対し、心から御礼を申し上げ
 ます。父なる神が彼女たちを
 祝福し、良き報いをお与えくだ
 さいますように！(…)

次に、重要さにおいてはひけ
 を取らないもう一つ別の問題に
 注意を向けたいと思います。皆
 さんの国はたいへん広いので、
 きわめて重要なのです。前にも
 言いましたが、メディアにおい
 て司牧の仕事に携わる人々に
 は、道徳的価値を正しく伝える
 責任があります。(九五年四月
 一日のお話)本日は、こうした
 マスコミ現象の主なものに注目
 してみましよう。

世論がマスコミによって決定
 的な影響を受けることは周知の
 事実です。これは若い世代を価
 値の世界へ導くための鍵となり
 ます。すでに第二バチカン公会

議は、「広報機関に関わる教
 令」の中で強調されています。
 「世論は、現在ではあらゆる階
 層に属する市民の公私の生活の
 上に多大な影響力を持つもので
 ある。それで、社会の構成員は
 みな、正義と愛の義務を果た
 さなければならぬ。正しい世
 論をつくり、それを広めるよ
 う努力しなければならぬ。」
 (8番)

従って司教の皆さんも、信徒
 がメディアと放送文化に福音の
 精神を吹き込み、あらゆる人々
 の必要に応じて人間の進歩発展
 に寄与するような番組、キリス
 ト教的な連帯を促すのに役立つ
 番組を求めることができるよう
 努めていただきたいものです。
 ジャーナリスト、記者、広告業
 者、映画やテレビの製作者、俳
 優、音楽家、芸術家などの人々
 は自分の個人的才能や技術、仕
 事の場における名声をイエズ
 ス・キリストへの明確な信仰の
 あかしと両立させねばなりません。
 信者たちの働くこの世界の
 複雑な諸現実に応じた使徒職活
 動を進め、支持し、指導するこ
 とは司牧者の務めです。それは
 福音の力によって、信者がまこ
 との地の塩、世の光(マテオ
 5・13・14)となるためです。
 (…)(九五・五・三〇、ブラ
 ジル司教団へ)

「教皇様の声」ヨハネ・パウロ二世教皇の聖教、書簡、講義等を解説なしに
 そのまま伝える月刊紙 毎月十日発行 定価 一部百八十円(送料別)
 一年予約 送料別 一〇五〇円から。詳しくは精進教育促進協会まで。

郵便振替
 01130-
 8-72393